

中近東とオペラ

170822

区分	年号	出来事	説明
アラビア半島	67	ユダヤ人の移住	ローマ帝国との戦いに負けて(ユダヤ戦争)、地中海、アラビア半島等に移住していった(ディアスポラ)。ローマ側で鎮圧を指揮したティトゥス・フラウィウス・ウェスパシアヌス(39~81)は、後の皇帝で、モーツァルトのオペラの主人公である。
	400	メッカ・メディナの繁栄	ササン朝ペルシャと東ローマ帝国の争いが激しく、シルクロードから紅海を経由する海上ルートが栄えた。
ムハンマド	570	ムハンマドの生誕	ムハンマド・イブン=アブドゥッラーフ(570~632)が、預言者としてハーシム家に生まれた。墓は、メディナにある。
	610	アラーの啓示	ムハンマドが、メッカ北東のヒラー山で、アラーの啓示を受け、イスラム教の布教を始める。
	622	聖遷(イスラム暦元年)	☞ムハンマド達は、メッカの大商人達から迫害を受け、信者が集まらず、メディナに拠点を移した。☞メッカ・メディナ戦争による死者の増加に対処すべく、寡婦、孤児の保護並びに戦闘員の士気管理のために一夫多妻制の制度化。 ☞メディナでは、共同体(ウンマ)を作り。また、メッカ方向に拝むことにした。
	624	断食(ラマダーン月)	メッカの大商人達に対して、メディナのムハンマドの教団側が勝利(バドルの戦い)し、ラマダーン月に断食を行うようになった。
	630	メッカを聖地とする	メッカや近隣のユダヤ人との戦いを繰り返しながら、メッカを支配し、聖地と定める。
正統カリフ時代	632	第1代カリフにアブー・バクルを選任	アブーバクル(573~634)は、イスラム共同体全体の会議により選出されたが、病死した。ムハンマドの親友であった。
	634	第2代カリフにウマルを選任	ウマル(592~644)は、武闘派で布教地域を拡大させた人だが、奴隷に殺害された。娘が、ムハンマドに嫁いだ。
	636	東ローマ帝国からシリアを奪取	ウマルは、ササン朝ペルシャとの戦いで、疲弊していた東ローマ帝国を、ヤルムークの戦いで破った。
	638	東ローマ帝国からエルサレムを奪取	ウマルは、エルサレムを支配にあたっては、税金の負担を条件として、ユダヤ教、キリスト教との共存を認めた。
	642	ササン朝ペルシャに勝利	☞ウマルは、東ローマ帝国との戦いで疲弊していたペルシャを、ニハーヴァンドの戦いで破り、651年にペルシャは滅亡した。 ☞その結果、歴史のあるイラン文化をその後のウマイヤ朝に取り入れることができた。
	642	東ローマ帝国からエジプトを奪取	ウマルは、642年アレキサンドリアを陥落させ、エジプトを支配下に置いた。
	644	第3代カリフにウスマーンを選任	ウスマーン(574~656)は、ムハンマドの次女ルカイヤを妻にしていたが、息子のアブドラ(626)は早くに死んだ。
	651	ササン朝ペルシャの滅亡とゾロアスター教の衰退	☞紀元前10世紀頃の古代ペルシャ、ザラスシュトラの教えを起源とする、善悪二元論的な宗教である。ササン朝ペルシャ(226~651)では国教としたが、イスラム教勢力の侵入により、ゾロアスター教は衰退した。 ☞モーツァルトが作曲した歌劇「魔笛」に、ゾロアスター教の教義等が取り入れていることで知られています。ザラストロが登場すること。善悪二元論、火を拝む等の教義である。
	656	ウスマーンが部下に殺害される	ウマイヤ家出身で選挙で選出されたが、出身母体を重視しすぎて部下に殺害される。コーランを整備した人。
	656	第4代カリフにアリーを選任	アリー・イブン・アビー・ターリブ(600~661)は、ムハンマドの養子で。ムアーウィアを押さえて選任されたが、妥協を許さないハワーリジュ派に殺害された。シーア派の第1代イマーム(656~661)と位置づけられる。、イラクのナジャフが聖地となった。
ウマイヤ朝	661	第1代カリフにムアーウィアが就任	ムアーウィア(603~680)は、ムハンマドの側近だったが、ダマスカスで、カリフ就任とウマイヤ朝を宣言した。 アリー支持者は反発してムアーウィアを認めず、アリーの子孫のみがカリフであるとして、シーア派を形成。
	680	第2代カリフにヤズィードが即位	ムアーウィアの子ヤズィード(647~683)が即位。しかし、ヤズィードは、ムハンマドの孫のフサインを、カルバラで虐殺(南バグダッド)したので、シーア派との分裂が決定的に。また、メッカのカーバ宮殿も攻撃したため、スンニー派からも嫌われた。
	685	第5代カリフにアブドルマリクが就任	アブドルマリク(646~705)は、アラビア語を公用語にした等、ウマイヤ朝中興の祖である。
	732	トゥール・ポワティエ間の戦い	インドからフランスまで進出しておりフランク王国と戦ったが、司令官が戦死したので、ピレネー山脈南側まで撤退した。

区分	年号	出来事	説明
アッバース朝	750	第1代カリフにアブー・アル＝アッバースが即位	<ul style="list-style-type: none"> ウマイヤ朝は、イスラムの私物化によりシーア派が反発していた。また、アラブ人と非アラブ人の不平等意識が高まり、結局、ムハンマドに繋がるアッバース朝に権力を奪われた。 アブー(722～754)は、クーデターによりクーファで、ムハンマドの叔父を子孫とするアッバース朝を創設した。アッバース家は、執拗にウマイヤ家の一族を殺害し、アッバース革命に協力したシーア派の人々を裏切り殺害、排除していった。
	756	後ウマイヤ朝が、コルドヴァに成立	イベリア半島の後ウマイヤ朝は、西欧最大の都市となりアッバース朝に匹敵するくらいに繁栄した。1031年に滅亡した。
	762	新首都バグダッドを新設。	<ul style="list-style-type: none"> 最盛期には、150万人の世界最大の都市になった。旧首都クテシフォンに保存されていた学問等書物を移動させた。 アッバース朝では、アラブ人の特権は否定され、すべての民族が平等となった。多くの文化が融合され、ヨーロッパ文明の母体となったが、1258年に、モンゴルにより破壊される。
	786	第5代カリフにハールーンが即位	<ul style="list-style-type: none"> 第5代カリフにハールーン・アッラシード(763～809)が即位した。アッバース朝の最盛期でありイスラム帝国とも言う。 ハールーンとズバイダ(768～823)夫婦の時代を描いている読み物が「千一夜物語」である。 ササン朝ペルシャの王様のためにシェエラザード姫が毎夜語る寝物語。9世紀頃に原形が出来たようだが著者は不明。
			<ul style="list-style-type: none"> 1888年にリムスキーコルサコフが、交響詩「シェエラザード」を作曲した。「千一夜物語」の情景をイメージしている。 1926年にプッチーニが、歌劇「トゥーランドット」を作曲した。「千一夜物語」の「九十九の晒首の下での問答」が下地である。 1958年にコルネリウスが、歌劇「バグダッドの理髪師」を作曲した。「千一夜物語」の「せむし男および仕立屋とキリスト教徒の仲買人と御用係とユダヤ人の医者との物語」が下地である。
	932	ブワイア朝が、バグダッドを占拠	カスピ海南岸のシーア派イラン系の部ブワイア家が興しイラクイランを支配し、946年に、バグダッドを占拠アッバース朝カリフから、世俗面の支配権を有する大アミール(首長)に任命された。しかし、1055年にセルジューク朝に支配権を奪われ滅亡。
	1055	セルジューク朝がバグダッドに入場	1055年に、アッバース朝カリフから、スルタンとして招かれバグダッドに入場し、トルコ、イラク、イラン、トルクメニスタンを支配し始めた。もともとは、カザフスタンのアラル海北方のイスラム・トルコ系遊牧民のセルジューク家が興した国である。
1071	セルジューク朝が東ローマ帝国を破る	東ローマ帝国を破りアナトリアを支配し、ルーム・セルジューク朝を興す。しかし、1243年に、モンゴル軍の侵入を許しその支配下に置かれた。	
イルハン朝	1256	第1代ハンのフレグ	フレグ(1218～1265)が、イラン高原タブリーズに樹立。チンギスハンの孫である。イラク、シリア、イランを支配。
	1258	フレグがアッバース朝を滅亡	第37代カリフのムスタアシムが降参しないのでバグダッドを全滅させる。80万人？が死に、博物館、図書館等の学術書、文化財等も川に捨て、 イスラム文化も全滅させた。
	1260	エジプト・マムルーク朝軍に敗北	アイン・ジャールートの戦いでマムルーク朝軍と、ガリラヤ(イエスが宣教を始めた場所)の丘陵地帯で激突した。
	1353	内部抗争で滅亡	キリスト教に親しみをもち、東ローマ帝国と友好関係にあった。兄弟間の帝位継承戦争に関わらず、イスラム化されていく。
ティムール朝	1370	ティムールがサマルカンドで建国	ティムール(1336～1405)は、イスラム化した軍人で、チンギス統原理は守り、モンゴル帝国再興を目指したが、病死した。
	1507	世代交代がうまくいかず滅亡	トルコ、バグダッド、デリー、ボルガ川流域を制覇する。バグダッドの破壊が大きく、その地域は20世紀まで疲弊していた。

区分	年号	出来事	説明
オスマン帝国	1299	第1代はオスマン1世	オスマン1世(1258~1326)は、トルコ人の遊牧民の部族長であった。初期には、ブルサが首都(1326~1365)であった。
	1396	ハンガリー王ジギスムントに勝利	第4代バヤズフィト1世(1360~1403)は、バルカン半島に侵攻し、ドナウ川沿いのルーセの西方ニコポリスの戦いで勝利。
	1402	アンカラの戦いでティムールに敗北	第4代バヤズフィト1世が捕虜となり翌年死亡。オスマン帝国は1413年まで空位状態。逆に東ローマ帝国は生き延びた。
	1453	東ローマ帝国を滅亡させる	第7代メフメト2世(1432~1481)の時代に、コンスタンティノープルが首都となった。その前が、エディルネ(1365~1453)。
	1516	エジプト・マムルーク朝が滅亡	第9代セリム1世(1465~1520)が、シリアのアレッポ北方のマルジュ・ダービクで戦い滅亡させる。以降、エジプトを支配。
	1517	メッカとメディナを支配	セリム1世が、マムルーク朝に代わり、スンニー派イスラム世界の盟主となる。
	1529	ハプスブルグ家と敵対	第10代スレイマン1世(1494~1566)が、フランソワ1世(1494~1547)及びプロテスタントと友好関係を結ぶ。
	1782	歌劇「後宮からの逃走」の作曲	モーツァルトが作曲。当時ヨーロッパはトルコブームであった。リズムを強調して打楽器を前面に出すのが特徴である。
	1877	ロシア帝国との戦いに敗北	第34代アブドルハミト2世(1842~1918)の時代にブルガリアのシブカ峠で敗北し、バルカン諸国が独立した。
	1922	アタチュルクがトルコ共和国を建国	ムスタファ・ケマル・アタチュルク(1881~1938)により帝国を廃して、第36代メフメト6世はマルタへ亡命し、
ムハンマドの家族	595	ムハンマドの最初の結婚	<ul style="list-style-type: none"> ☞ムハンマドは、15歳年上で裕福な未亡人ハディージャ(555~619)と結婚した。 ☞2男4女を出産した。次女ルカイヤは第3代カリフのウスマーン・イブン・アッファーンと結婚し、四女ファーティマは、第4代カリフのアリーと結婚したが、次男と長女と三女は、成人前に死去した。
	605	アリーは養子だがムハンマドの息子である	<ul style="list-style-type: none"> ☞従弟のアリー(600~661)は、実家が貧しかったのでムハンマドが養子にして、ハディージャが育て、第4代カリフとなった。 ☞ハディージャに育てて貰ったアリーは、継母となったアイーシャとは、仲が悪かった。
	623	ムハンマドの再婚	<ul style="list-style-type: none"> ☞ムハンマドは、ハディージャの死後、12人の妻をめとる。 ☞親友アブー・バクルの娘で9歳だったアイーシャ(614~678)とも結婚した。3番目だったが、他の妻達はすべて再婚であった。 ☞女性のベール着用は、砂漠で、アイーシャが見も知らずの男性に助けられたこと、に不信感を抱く人々が居たことによる。
	624	ムハンマドの娘とアリーの結婚	四女のファーティマ(606~632)は、ムハンマドの養子のアリーと結婚した。3人の息子と2人の娘をもうけたが、26歳の早死にだった。長男ハサン・イブン・アリー、次男フサイン・イブン・アリーは、ともにシーア派の第2代、第3代イマムとなった。
	661	第2代イマームにハサンが就任	父アリーの後を継いだ穏健なハサン・イブン・アリー(624~669)は、ムアーウィアとの闘争を避けメディナに隠居したが、性依存症の症状を見せた。
	669	第3代イマームのフサインが就任	<ul style="list-style-type: none"> ☞兄ハサンの後を継いだムハンマドの孫フサイン(626~680)は、クーファに向う途中、カルバラでヤズィードに虐殺された。 ☞ムハンマドの孫フサインは、ササン朝ペルシャの最後の王ヤズデギルド3世の娘ジャハーン・シャーと結婚した。そのため、ペルシャは、ムハンマドの子孫を引き継いでいくことになったので、サファヴィー朝以降のイランがシーア派となったのである。
	680	第4代イマームにアリーが就任	<ul style="list-style-type: none"> ☞アリー・ザイヌルアービディーン(658~713)は、ムハンマドの曾孫で父後を継いだが、イスラム法の研究活動を行った。 ☞ペルシャ人のジャハーン・シャーが母で、アラブ人のフサインが父である。
	799	第8代イマームにアリー・リダーが就任	<ul style="list-style-type: none"> ☞父の後を継いだアリー・リダー(766~818)は、メディナで生まれた。 ☞アッバース朝の権力闘争に巻き込まれ毒殺され殉教した。聖地は、イラン第二の都市マシュハドである。